絵本を活かす生活経験の質―一人ひとりを尊重するために―

佐々木　宏子

はじめに　「絵本の読み聞かせは、子どもの発達にどのような効果があるか？」という問いを問い直す

乳幼児期の絵本研究では、これまで「絵本の読み聞かせは、乳幼児の○○の発達にどのような効果をもたらすか」という問いが数多く設定されてきた。○○の中には、様々な発達評価尺度をつかい、「言葉」をはじめ「社会性」、「コミュニケーション力」、「人間関係」、「学力」、「運動能力」等が測られる。確かにこのような視点の絵本研究も必要かもしれない。

しかし、乳幼児が一冊の絵本と出会う時に生じる豊かな経験を、既成の発達尺度に閉じ込めて「回収」してしまうことは、絵本を読みあうことの最も大切な意味が置き去りにされることにならないか。

絵本は、子どもが自らの経験、感情、身体感覚、他者との関係などを持ち込みながら、新しい意味世界をつくる媒体でもある。したがって重要なのは、**「絵本によって何が身についたか」だけではなく、「その子が絵本を通して、自らどのような意味世界をつくり表現しているのか」**という問いこそがもっと必要ではなかろうか。

１．絵本は「教材」ではなく「子どもが自分の生活経験を持ち込み、世界を解釈しなおすための媒体」―「始まり」と「終わり」のある構造をもつ「もう一つの世界」―

①絵本を読みながら、自分の経験を語る（読みなおす）。
②同じ絵本を繰り返す。繰り返しとは、同じ情報を受け取ることだけではなく、同じ対象との関係を更新することでもある。
③絵本の中の行為を再現させて確認する。
④２冊（複数）の絵本を結びつける。
⑤絵本のテキストを変えて読む。
⑥あるページを抜かして読んで欲しいという（紙芝居）。

具体例の一つとして、ラチョフ作の二冊の絵本『てぶくろ』を取り上げて考えてみる。

２．保護者（親・保育者等の読み手）の役割―「教える人」から「子どもの意味世界生成の伴走者」へ―

子どもの反応をあらかじめ標準的発達の目標に落とし込むのではなく、「この子はいま、何を感じ、何を面白がり、どんな世界をつくろうとしているのか」を読み取る必要がある。そのためには、保護者自身が「標準的な子ども像」に囚われることなく、**目の前にいる一人ひとり**

の子どもの固有性を見る力を持たねばならない。絵本の読みあいの質は、選書や読み方の技術だけでなく、**子どもの生活全般を共有する保護者の眼差しの質**によって決まる。子どもが絵本から何を見つけ、その好奇心や感動をどのように表現しているかを見抜くことである。

・「未言語的意味世界」に注目する

乳幼児の絵本経験には、まだ言葉によって十分に説明されていない意味世界が膨大に蓄積されている。笑い、驚き、喃語（発声）、身体の動き、視線、指差し、繰り返し、表情、言葉などに現れる。それが何を意味しているかは、生活を共有している者にしか理解できないことが多い。これは単純な「非言語行動」ではない。むしろ、**言語になる以前から、子どもは世界を意味あるものとして経験しているのである。**

この領域を「未言語的意味世界」と捉えるなら、絵本研究は言葉などの獲得だけではなく、**言葉になる前の意味生成**にも目を向ける必要がある。そのためには、子どもの生活体験や環境を共有し熟知していることが大切になる。

・「パクパク問題」（食べるふり）を考える―何が可笑しいのか？―

世界の秩序を知りながら、その秩序を外す他者に出会い、その意外さを一緒に楽しむ。そこには、認識の発達だけでは説明しきれない、他者との関係のなかで生まれる笑いがある。そして、絵本は、そのような行為や関係が生まれるきっかけにもなっている。

３．子どもを「標準的に発達すべき対象」から、読書の主体へ戻す―「一人ひとりを尊重する」とは何か―

「一人ひとりを尊重する」とは、単に個人差を認めることではない。個人差という言葉には、標準がある。標準からどれだけ違うか、という比較の構造が残っている。それに対して、一人ひとりが、それぞれ固有の意味世界を生きていると考えるなら、研究者は「標準からの距離」を測るのではなく、その子の世界そのものを理解しようとすることになる。

つまり、個人差を見ることから、個別性そのものを見ることへの転換である。

大人が見るべきことは、子どもの発言を評価することではなく、子どもによって世界がどのように見えているかを、一緒に発見することなのだと思う。

読んでいないときにも、絵本が子どもの意味世界の形成に参加しているという事実を大切にしたいと思う。

①好きな絵本は独り占めにしたい。

②寝るときも離さず枕元に置く。

③読んでいなくても他者が触ることを嫌う。

年長児になると、絵本を理解する能力だけではなく、絵本との関わり方を自分で選び、その関わりを通して他者との関係を育む。